公開講演会記録

旧満洲の中のロシア
――歴史を刻みつけた国際都市・ハルビン

大阪大学名誉教授　生田美智子

はじめに

中国黒龍江省の省都ハルビンの街を歩くと、ロシア料理店やショップが目につきます。第2次世界大戦終了まで、ハルビンは「東洋のパリ」「東洋のモスクワ」と言われ、日本からもっとも近いヨーロッパでした。満洲国時代の絵葉書では、欧風の街並みを背景にブロンドの女性を配したシーンが好まれました。多民族・多文化が共生する国際都市ハルビンも文化大革命で多くの文化財が破壊されてしまいましたが、現在は再び「ハルビンの中のロシア」が観光の目玉として売り出されています。

「（哈爾賓）行き交う人も忙がしき繁華なる十字路」とある

今回の報告では中国でも価値が再認識されはじめた「満洲の中のロシア」をハルビンに焦点をあてることで取り上げたいと思います。

なお、ここでいう「ロシア」とはエスニック（民族的）な意味ではなく、ロシア帝国臣民（ロシア語話者）をさすということをあらかじめお断わりしておきたいと思います。

約60年間、満洲に存続したロシア社会ですが、本国ではソ連崩壊まではその存在は完全に無視され、言及されることがあっても「白匪」や「帝国主義の手先」などのレッテルをはられ、反革命としての位置づけでしかありませんでした。文学活動も活発に展開されましたが、アジアに対する関心のうすさもありハルビンの亡命ロシア文学が取り上げられることはほとんどなかったのです。そのため、西側亡命ロシア社会の単なるアジア版と認識され、事実誤認も散見されました。

ソ連崩壊後はロシア史の全体像を把握したいという欲求がおこり、在外ロシアという枠組みのもと、研究が加速度的に進行するようになりました。ソ連崩壊後

に独立した旧民族共和国に取り残されたロシア系ディアスポラ（故郷から離散した人々）や、グローバリゼーションによる移民研究の隆盛も在外ロシアの研究を加速しました。さらに、ソ連崩壊により、極秘扱いであった歴史資料にアクセスできるようになったことも研究の追い風となりました。

この報告では、ハルビンのロシア社会をロシア帝政期、亡命ロシア時代前期、亡命ロシア時代後期、ソ連期にわけて、歴史的に概観し、その特徴を考察しようと思いますが、それはロシア史の失われた環を取り戻すだけでなく、中国の都市ハルビンの国際性を理解するためにも必要と考えられます。

ロシア帝政期

ロシア帝政期は、中東鉄道を建設して帝政ロシアが満洲に進出してから１９１７年の革命で帝政ロシアが崩壊するまでです。ロシアは、日清戦争後の「三国干渉」により日本の遼東半島領有を阻止した報酬として、清朝から中東鉄道の敷設権と経営権を獲得しました。鉄道建設の拠点として、スンガリー川（松花江）と鉄道の交差する地点に位置するハルビンが選ばれました。中東鉄道はシベリア鉄道によりヨーロッパに接続され、ウラジオストクにより日本海に接続されるので、ハルビンはヨーロッパとアジアに開かれた空間となりました。

ロシア帝国は鉄道建設の人員を確保するため、国内におけるような民族による居住制限や宗教的な差別政策を採用せず、寛大な政策を採ることで移民を奨励しました。

さらに、優秀な人材を確保するために、福利厚生施設や文化施設の建設にも力をいれたので、様々な民族がロシア帝国から移住し、ハルビンは急速に国際的な多民族都市となりました。ロシアは中東鉄道附属地を拡大し、警察、司法、教育などの諸制度を導入し、満洲にロシアのレプリカ（複製）をつくりました。中東鉄道沿線は事実上ロシアの植民地となり、ロシアの通貨が流通し、ロシア語が話されました。街の看板もロシア語で書かれました。中東鉄道沿線は中東鉄道長官ホルワットの名前をとって「幸福なホルワット王国」と言われました。

１９０５年、日露戦争敗戦によりロシアは南満洲の利権を日本に委譲しました。同年の第１次ロシア革命はハルビンにも影響を与え、ロシア人住民の間に自治要求が高まりました。中島毅の研究によれば、１９０８年に市会が成立し、市政は選挙で選ばれる立法機関としての市会と執行機関としての市参事会により統括され、ロシア人の市参事会議長が市長を兼任しました。

市会ではロシア語が公用語であったことからもわかるように、ロシアが主導的立場をとっていました。

中東鉄道は沿線各地に教会と鉄道クラブを設けていきました。特にハルビンでは１９０８年、中東鉄道交響楽団が創設され、文化レベルの高さが誇示されました。こうしてハルビンは西洋音楽の都となり、ハルビン経由でアジアに西洋音楽が輸入される素地ができました。その他、競馬や競輪、ヨット、スピードスケートやテニス、ダンスなど、多くの西洋の娯楽が輸入されました。食生活も欧風化すべく、パンやバター、キャベツ、ソーセージなどロシアから多くの西洋野菜や果物、食品が移植されました。

１９１３年に行われた人口調査によると、６万８５４９人のロシア住民がハルビンでくらし、集まった民族は53にもなりました。百人以上の人口を擁した民族だけでも以下のようなエスニックグループがありました。

ロシア人3万4313人、中国人2万3537人、ユダヤ人5千32人、ポーランド人2千556人、日本人696人、ドイツ人564人、タタール人234人、ラトヴィア人218人、グルジア人183人、エストニア人172人、リトアニア人142人、アルメニア人124人でした。ロシア系住民が中国人よりも多いことに注目しておきましょう。

中東鉄道の城下街・ハルビンはロシア風のエキゾチックな街として発展していくことになりました。

亡命ロシア時代前期

この時代は、1917年ロシア革命から第2次世界大戦終了までの時期で、満洲国の建設を境として前期の中華民国時代と後期の満洲国時代に分けることができます。1917年のロシア革命はハルビンにも波及し、ボリシェビキが一時権力をとりました。中東鉄道長官のホルワットは中国軍を鉄道に導入し、革命勢力をしりぞけましたが、中国軍を導入したことは中東鉄道における中国勢力のプレゼンスを増すことにつながりました。

革命の影響はハルビンの人口にも甚大な影響を与えました。ソ連政府の政治的圧力により、ソ連から逃亡、亡命してきたロシア系住民がハルビンに大量に流入してきたのです。ロシア革命後、国外に亡命した人は約200万人といわれますが、帝政ロシアのインフラが整っていたハルビンにはとりわけ多くのロシア人が流入してきました。ベルリン、パリ、プラハという西側亡命地と並ぶ亡命地となったのです。ハルビンが亡命ロシアの最大の流入地であったというイタリアの研究者もいるほどです。

亡命者は流動が激しいので、どの時点で集計するかにより人口数に変動が見られますが、革命やその後の内戦の混乱の中、ロシアから難民が大挙してハルビンに流入したことは間違いがありません。ロシアの研究者メリホフによれば、亡命者流入には、3つの波が見られるといいます。第1は白軍のコルチャーク政権崩壊によるもの（1919年末～20年初頭）、第2は白軍のセミョーノフ軍の敗退によるもの（1920年）、第3は、極東共和国のソビエト・ロシアへの併合と共産党支配の確立によるもの（1922年）です。最盛期の1922年にはハルビンの人口は15万5000人に達したといいます。

北満ではロシアが建設した中東鉄道が機能していたので、帝政ロシアが滅んでも亡命ロシア人は政治的・経済的な力を保持していました。一方、中国はロシアの混乱に乗じ、さまざまな権益を回収していきました。上田貴子の研究によれば、その過程は3段階にわけることができます。すなわち、第1段階は1917～20年にかけての鉄道附属地の軍事・警察権の回収、1919年の哈大洋発行による幣制回収、第2段階は、1920年代前半の中東鉄道の中露共同管理への移行ならびに市政管理局東省特別区行政長官設置、第3段階は、1926年の自治権回収です。しかし、中国はロシア人勢力を排除することなく、ハルビンは国際都市であり続けました。

中東鉄道に長年君臨したホルワットに続いて中東鉄道長官に就任したオストロウーモフはソ連ではないロシアの最後の長官で、彼は在任期間（1921～24年）中に、鉄道経営を再建しました。中東鉄道はオーケストラやオペラなど文化や教育、医療に力をいれ、ロシア文化は繁栄を迎えました。

1924年、中国がソ連を承認し、中東鉄道は中ソ合弁企業に移行しました。経営は安定し、全体としてのロシア社会は繁栄を迎えます。しかし、これによりソ連国籍と中国国籍の者のみが働けるこ

とになりました。帝政ロシア時代からの古参の鉄道員は帝国崩壊後も無国籍のまま働き続けていましたが、これ以降はソ連国籍か中国国籍を取得しない場合は失職することとなりました。

多くの者が失職しないためにソ連国籍を取得し、かれらはハルビン・ラディッシュ（外は赤いが中は白い大根）と言われました。従来の鉄道員はソ連国籍取得者、中国国籍取得者、無国籍者に分かれました。鉄道経営のためにソ連国籍の幹部が派遣され、ハルビンではソビエト・ロシア社会と亡命ロシア社会が拮抗する規模で共存するという、世界でも類をみない空間が現出しました。

ソ連から来た人は「純粋ソ連人」といわれ、ハルビンでソ連国籍を取得した地元のロシア系住民は「半ソ連人」と言われました。これによりハルビン社会は赤系と白系に分裂することになり、日常生活の中に、従来になかった対立の構図が持ちこまれることになりました。それは失業した貧困層と安定した生活を維持する富裕層の経済的格差、新旧度量衡、新旧正書法、白い葬式と赤い葬式など、日常生活の中で様々な局面で見られることとなりました。

ロシアに対し利権回収をすすめてきた奉天の軍閥政権は、１９２８年、国民政府と合流し、国民国家形成のためロシア勢力を排除する動きを見せました。１９２９年５月、ソ連領事館強制捜査とソ連共産党員の逮捕を敢行し、６月、ソ連系企業が閉鎖され、さらに東省特別区（旧中東鉄道附属地）全体で１６８３名が逮捕される事態になりました。

中国は、解雇したソ連従業員の後任に亡命ロシア人を雇用し、鉄道に白系ロシア人警備隊を創設しました。７月、ソ連は国交断絶を宣言し、８月、国境を越えて中国に侵攻しました。亡命ロシア系の新聞『ルベージ』によれば、戦場となった三河地方のコサック部落では、１５０人の亡命ロシア人が殺害されたといいます。この「三河の悲劇」により、多くの亡命ロシア人が難民となりハルビンに流入し、３００人がハルビンの難民救済所で登録をしたといいます。中ソ紛争はソ連の勝利に終わり、12月にハバロフスク議定書が調印され、中東鉄道は原状復帰され、亡命ロシア人は再び失職しました。

亡命ロシア時代後期

１９３２年、満洲国の建国により亡命ロシア社会は次の段階に入りました。

日本は他国の領土を切り取り、傀儡国家を建設したことを正当化するために、建国目的に「五族協和」や「王道楽土」のスローガンを謳いあげました。建国宣言では五族とは漢族、満族、蒙族、日本人、朝鮮族となっており、ハルビンのかつての覇者であったロシア人は主要五族の中には入っていませんでした。しかし、ロシアを無視することはできず、五族協

左から「満人」、朝鮮人、モンゴル人、ロシア人、日本人。なお「満人」とは満洲国時代に日本人が用いた呼称で、主に漢人を指す〈祐生出会いの館蔵〉

和を謳うポスターにはしばしばロシア人が登場しました。

満洲の地に西洋文明を持ちこんだと自負するロシア人は国内外の情勢により主要五族の中にいれられたり、はじき出されたりする自らの立場に屈辱的な思いを味わいました。従来日本人は3千数百名しかハルビンにいなかったのですが、満洲国建設を機に内地から日本人が大挙流入してきました。日本は満洲国内の多民族を統合するために協和会を設立し、ロシア人部も設置しましたが、誇り高いロシア人にはうまく機能しませんでした。

それどころか、日本がロシア人の会社や住宅を接収したので、満洲国が理想とはかけ離れた国家であることに気づき、ロシア人はハルビンから上海に流出していきました。1932年の大洪水もハルビンからのロシア人の流出を加速しました。1920年代末〜30年代初めの不況の中でハルビンの治安が悪くなり、身代金目当ての誘拐事件が多発するようになり、これもハルビンからのロシア人の流出を加速しました。

1934年12月、「白系露人事務局」が設立されました。日本は何度も亡命ロシア人を統合させようとしましたが、すべてうまくいかず行政的な統合に切り替えたのでした。すなわち満洲在住のロシア人に事務局への登録を義務付けたのです。1935年には、個人会員2万3500名、団体会員163団体の登録がありました。日本はロシア人を管理しましたが、その一方でソ連への対抗上、伝統的ロシア文化を保護しました。白系露人事務局の建物には帝政ロシアの旗が翻り、ニコライ二世のポートレートがかかっていました。

こうした援助のもとで、ハルビン交響楽団がつくられ、楽団に附属した東亜のロシアオペラ座とオペレッタの劇団も創設されました。かつての中東鉄道交響楽団を再建することは音楽好きのロシア人の心をつかむ恰好の贈り物であるだけでなく、ロシア人に仕事を提供することができ、満洲の文化レベルの高さを世界に宣伝する効果も絶大でした。東亜のオペラ座創設は白系露人事務局の幹部であるロシア・ファシスト党党首のロザエフスキーがイニシアチブをとり、何度も関東軍にかけあって実現したものであることが文書館の史料に残っています。

白系露人事務局は日本当局からすればロシア住民を一元管理する装置でしたが、亡命ロシア人から見れば、公的なレベルで自分たちの利害を代弁し、その民族文化的な統一性を保証する独特な「亡命者の政府」でもありました。

1935年3月、ソ連が中東鉄道を満洲国に売却したことから、ソ連国籍者が大量に引揚げることになりました。『ザリャ』という亡命ロシア人系の新聞によれば、2万1500人が引き揚げたといいます。その一方で、無国籍に転籍し、ハルビンに残留するソ連人もかなりありました。この時にソ連に引き揚げた人々は1937年、スターリンの大粛清の時に、「ハルビン人」という理由だけで粛清されました。彼らは帰還亡命者とよばれ、「ポーランド人、ラトビア人、ドイツ人、エストニア人」などと並んで「スパイ活動、破壊活動を行う分子」として敵性民族のように扱われ粛清されました。ハルビン人とは江戸っ子や浪速っ子のようなもので、民族名でないことは論をまちません。

ハルビンには6000人ほどのソ連人が残留し、満洲国はソ連人引揚げに伴って同年7月、残留者のために「蘇聯居留民会」の設立を許可しました。従来、ソ連人は中東鉄道が統括していたのですが、以後は蘇聯居留民会が亡命側の白系露人事務局のような働きをすることとなりました。

亡命ロシアとソビエト社会とは政治的には相いれませんでしたが、亡命ロシアの製品をソ連が購買したり、亡命ロシア人が経営する高級バーやキャバレーの得意先が中東鉄道幹部であったり、文化的・経済的にはひとつの市場を形成し、全体としてロシア人のプレゼンスを増しました。しかし、ソ連勢力が撤退したことでハルビンのロシア市場は大量に需要を失い、全体としてのロシア社会が衰退しました。また、日本の統制を嫌った亡命ロシア人は上海、奉天など中国各地に移住したり、アメリカやオーストラリアに移住したりしました。

日中戦争が長引くにつれ、日本はロシア社会にも戦争協力を要請するようになりました。１９３８年には満洲国軍の秘密部隊として白系露人部隊、いわゆる浅野部隊が設立され、１９３９年には満洲国国防婦人会ロシア部が創設されました。１９４０年２月、新兵役制が発表され、ロシア人も19歳以上は兵役に服する義務を負うこととなりました。

１９４１年４月、モスクワで５年間有効の日ソ中立条約が締結されました。その一方で、同年６月には、ノモンハンでソ連軍と戦って戦死したミハイル・ナターロフを反共戦士と称える碑が中央寺院の前に建設されました。しかし、その約２週間後、６月２２日、ドイツがソ連に侵攻したことで亡命ロシア人の愛国心に火がつき、一挙に親ソ勢力が拡大しました。

世界中に散在する亡命ロシア人に愛国的気分がめばえましたが、とりわけ、満洲の亡命ロシア人にはその傾向がつよく、80～90パーセントが親ソ的気分になったといいます。亡命ロシア人の回想によると、その理由は、第一に日本の亡命ロシア人への圧力が耐えがたいレベルに達していたこと、第二に、満洲の事実上の支配者である日本がドイツの同盟国であったことです。

同年、７月、独ソ戦開始を好機として関東軍特別演習の命令が発動されましたが、計画は断念されました。

日ソ中立条約が締結されると、ソ連との摩擦軋轢をさけるようになった関東軍は亡命ロシア人を諜報目的で利用するのを徐々に避けるようになっていきました。

一方、日本の偽善的民族政策（平等な民族協和をうたいながら、日本人への同化を促す）に、亡命ロシア人は反発し、特に若い世代にソ連への共感が芽生えました。１９４４年１月、神道の国教化を押し付ける日本の圧力に亡命ロシア人が猛反発し、同年２月、ロシア正教のハルビンの大主教、ハイラルの主教、チチハルの主教は神社参拝を禁じる書簡を正教徒に送り、亡命ロシア社会の親ソ感情を喚起する力となりました。

さらに同年末には、ハバロフスクで週２回の地下放送が始まり、亡命ロシア人は「満洲国通信社」（国通）では得られない情報を得ていました。

ハルビン神社；1935年に建てられ、近くにはロシアの中央寺院もあった

ソ連期

１９４５年８月９日、ソ連軍が満洲に

侵攻し、16日にはハルビンに入城しました。ネストル大主教はソ連軍のハルビン入城を祝福し、亡命ロシア人の多くもそれを歓迎しました。ある亡命ロシア人はその時のソ連兵に対する感情を「ロシアの息吹をもたらした。身内のロシア人だった」と回想しています。愛国心と反日感情を強めていた亡命ロシア人は高揚感をもってソ連軍をむかえましたが、そのような雰囲気は長くは続きませんでした。

「スメルシ（スパイに死を）」といわれたスターリン直属の国防人民委員部防諜総局がやってきて、多くの亡命ロシア人を逮捕しました。白系露人事務局の幹部であったナゴレンやマトコフスキーがソ連のスパイであったことが判明しました。

ソ連軍は白系露人事務局の書類を押収し、日本に協力した亡命ロシア人を一網打尽に逮捕しました。逮捕者は1万5000～1万7000人にのぼったと言われています。コサックの指導者セミョーノフやファシスト党党首のロザエフスキーだけでなく、一般人までも逮捕され、ソ連で死刑に処されたり、強制収容所に送られました。

ソ連が押収して持ち帰った白系露人事務局の書類はKGBが保管し、極秘扱いでアクセス不可能でしたが、ソ連崩壊後はハバロフスクの国立文書館に移管され、現在は閲覧することができるようになっています。赤軍は1945年8月から翌年4月末まで満洲を占領しました。

1945年8月、中ソ間で「中国長春鉄道」に関する協定が締結され、中東鉄道はふたたび中ソ共同経営となり、1935年のソ連による中東鉄道売却で解雇されたロシア人鉄道員が再雇用されました。

ハルビン駅；アールヌーボー式の建物。満洲国時代には正面玄関に「大満洲国」の看板が掲げられていた

ソ連領事館がロシア系住民を統制下におき、日常生活はソ連式になりました。白系露人事務局にかわる「ソ連市民協会」が設立され、ソ連市民になるよう亡命ロシア人を教育しました。溥儀の肖像画はレーニンとスターリンの肖像画に、ロシア帝国国旗はソ連国旗に変更されました。

街にはソ連の本、雑誌、新聞が溢れ、ソ連映画が上映され、ソ連の歌が流れるようになりました。1940年代末から50年代初頭にかけて「ソ連青年同盟」などのソ連式の組織が活発に活動しました。

1949年10月、中国共産党により中華人民共和国が建国され、中ソは一枚岩の団結をほこり、翌50年2月、モスクワで中ソ友好同盟相互援助条約が締結されました。中国は「ソ連に学べ」のスローガンのもと社会主義化をすすめました。ソ連から多くの専門家が援助のため中国各地に赴任すると、ハルビンのロシア人に対する差別が露骨になりました。ハルビンのロシア人と正真正銘のソ連人とは区別され、交際が禁止されました。

1952年、中東鉄道（中国長春鉄道）が中国に返還されると、ロシア人の生活は苦しくなりましたが、ハルビンのロシア人はソ連に引き揚げようとはしませんでした。1953年、スターリンが死去

し、その翌年からソ連領事館は在ハルビンロシア人にソ連の非正規パスポートの発行を許可し、処女地開拓を条件にソ連帰還を許可しました。

ソ連に愛国心を持つ若者はソ連帰還を望み、一家が離散することもありました。この状況下でロシア住民は大きく２つに分かれました。第１は、ソ連に引き揚げるグループです。１９５４～55年の二年間、中国からソ連への大量引揚げが続きました。第２は、第三国に第２次亡命するグループです。第３の途、すなわち中国に残留した人はほんの一握りでした。この頃の中国では、若者はロシア語で高等教育を受けることができず、ロシア人にとり未来がなくなったと回想記に書かれています。ロシア住民はディアスポラを維持できない状況におかれ、１９６０年代の半ばにはほとんどのロシア系住民は中国を離れました。現在、世界各地に離散したハルビンロシア人は世界的な広がりの同窓会などのネットワークを立ち上げ、会誌を発行し、回想を記録しています。

おわりに

中国の都市ハルビンは独特の文化を紡ぎ出しました。もともとは、満洲族やモンゴル族がすむ地域でしたが、中東鉄道の建設はロシア人やヨーロッパ系の民族だけでなく、漢民族の流入をも呼びおこし、従来からの民族が少数民族となり、外来文化がドミナント（主流）な独特の文化が現出されました。纏足や弁髪よりもロシアを中心とするヨーロッパ系の文化のほうが主調の独特の文化、すなわち、外来の文化の方に本来の文化が適応するという独特の現象がみられました。

ハイブリッドなヨーロッパ系多文化の共生はハルビンの特徴でしたが、亡命ロシアとソビエト・ロシアの対立にみられるように、同一文化の中で対立することもありました。１９３２年に満洲国を建国した日本は亡命ロシアとソビエト・ロシアの対立を巧みに利用し、アジア系の民族だけでなくヨーロッパ系の民族の支配も可能にしました。１９３５年の中東鉄道売却によりソビエト・ロシアは撤退しましたが、１９４５年のソ連軍の侵攻後は、ソビエト・ロシアは社会主義イデオロギーを通じて中国に影響を拡大しました。しかし、１９６０年代の文化大革命によりその影響は破壊され、ロシア文化は姿を消したかのようでしたが、最近は文革で破壊した中央寺院の複製がハルビン郊外に建設されるなど、観光資源としてロシア性を回復しつつあるようです。

私の『満洲の中のロシア』をあわせて参照していただければ幸いです。

なお、掲載したポスターの五族がどの民族であるかに関しては、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授の中見立夫先生から貴重なご助言を得ました。

（２０１４年４月25日・フォーラム）

講師略歴（いくた　みちこ）

徳島県生まれ
１９７４年　大阪外国語大学大学院修士課程修了
１９９８年　大阪外国語大学教授
２００１年　言語文化学博士（大阪大学）
２００７年　大阪大学教授
２０１２年　大阪大学名誉教授
著書『大黒屋光太夫の接吻』、『外交儀礼から見た幕末日露交流史』、『高田屋嘉兵衛』、編著書『満洲の中のロシア』など。